編集後記

新型コロナウイルス禍も3年近くが経過した。8月の第7波はオミクロン型の大流行であったが、緊急事態は発出されることはなく、収束に向かっている。

今回は病院職員の感染が増え、労働喪失が医療逼迫に拍車をかけた。しかし、マスクを着用せず、カフェで談笑したりする欧米の状況をテレビで見ると明らかにコロナを普通の病気として扱う方向に舵を切っている。同様に、日本でもコロナに対する社会の受け止め方は随分変わった。そんな状況下で広報誌もそろそろ通常回帰を考えなくてはいけないだろう。

第66回九州ブロック学校保健・学校医大会・令和4年度九州学校検診協議会（年次大会）の基調講演のGIGAスクール構想には個人的に興味がある。日本がICTで世界に後れを取っているとのことで、是非、推進して欲しい事業であるが、何よりも教員への啓発と児童生徒への早急な啓発が必要であろう。

「前立腺癌について」は総論として楽しく読ませてもらった。手術療法は現在、da Vinciによる腹腔鏡下前立腺全摘術が広く行われていることは承知しているが、すでに沖縄県内に2022年9月現在で中部徳洲会、琉球大学病院、中頭病院、友愛医療センター、南部徳洲会病院にはhinotoriと多数施設に導入されていることは驚いた。民間病院の設備投資の意欲の旺盛さに感心するとともに、今後益々普及して行くものと思われる。

「人はどこまで自分の死のあり方を選択できるか」は著者が脳外科医として、急性期の現場で苦悩する状況が目に浮かんだ。臓器提供ともなると個人の死生観、家族の思いなど大変重い課題であり、それに対して私たち医療者は、どのような姿勢で望むべきか？私自身も暗中模索の毎日である。

第8波はインフルエンザと同時流行になることが懸念され、医療逼迫がさらに厳しくなると予想されている。しかし、コロナ対策は緩和されていても、ウイルス対策に特別なことはなく、ワクチンを打ち、マスク、手洗いなどの感染対策を凡事徹底する以外にはない。さらに、大切なことは、感染は繰り返すものであり、感染症にどう向き合っていくか。公衆衛生や感染症医療の在り方についての社会の合意形成である。

広報委員　久貝　忠男